20130228

絵本学会 NEWS No.47

発行：絵本学会
発行日：2013年2月28日
編集：絵本学会広報委員会

絵本学会事務局：〒112-8681 東京都文京区目白台2-8-1
日本女子大学児童学科　石井光恵研究室内
E-mail:ehon-g@xqe.biglobe.ne.jp
http://www.u-gakugei.ac.jp/ehon/index.html

絵本学会

第16回絵本学会大会開催のお知らせ
第15回絵本学会大会報告
──シンポジウム「絵本の大衆性」
2012年度絵本研究会報告
──絵本とブックデザイン
理事会報告
お知らせ
子どもたちは絵本の世界に全身で飛び込む　正置友子
絵本展覧会情報

第16回絵本学会大会開催のお知らせ

第16回絵本学会大会は2013年6月15日（土）・16日（日）、「ユニバーサルデザイン」を理念の一つとする静岡文化芸術大学が共催となり、同大学を会場として開催されます。いろいろな立場から絵本を楽しみ、多視点で考え、絵本の広がりを再認識する機会になればと願い、大会テーマは「え？ほん!?　―あれも絵本 これも絵本―」に決まりました。大会プログラムは以下を予定しています。多数ご参加ください。

研究発表・作品発表の募集要項は本誌14頁をご覧ください。

★大会テーマ：え？ほん!?　―あれも絵本 これも絵本―
★期日：2013年6月15日（土）・16日（日）
★会場：静岡文化芸術大学（JR浜松駅至近）
★参加費：会員1,000円、一般2,000円（一日のみ参加の場合1,500円）、大学生以下無料

大会期間中、学会員（作品発表者）の作品展、ユニバーサルデザイン絵本コンクール2012作品展、学生作品展を開催します。

第16回絵本学会大会実行委員会事務局（委員長：鈴木善彦）
静岡文化芸術大学（文化政策学部文化政策学科・林左和子研究室）
〒430-8533 静岡県浜松市中区中央2-1-1
http://www.suac.ac.jp
TEL/FAX: 053-457-6178　E-MAIL: ehon@suac.ac.jp

宿泊先について
JR浜松駅周辺には多数の宿泊施設があります。今回、実行委員会では宿泊案内をお送りいたしませんので、ご宿泊される場合は、参加者各自で手配されますようにお願いします。

プログラム（予定）

6月15日（土）
11:30～　受付
12:00～　開会式
12:40～　ユニバーサルデザイン絵本コンクール受賞作品の紹介とストーリーテリング
13:20～　シンポジウム「共に生きる　絵本にできること」
15:20～　研究発表
17:30～　絵本学会総会
19:00～　交流会（会場：遠鉄百貨店新館13階スカイテラス）

6月16日（日）
8:30～　受付
9:00～　作品発表
11:10～　スズキコージ絵本ライブ
13:30～　研究発表
15:50～　ラウンドテーブル
R1「ユニバーサルデザイン絵本」
R2「モノとしての絵本」
17:30～　閉会式

第　15　回　絵　本　学　会　大　会　報　告

シンポジウム「絵本の大衆性」

2012年6月3日(日)　熊本県山鹿市「八千代座」

オープニング
司会　長野ヒデ子（絵本作家）
朗読　内田麟太郎（絵本作家）
　　山口マオ（絵本作家）

長野：二日目、最後のシンポジウムに入ります。内田鱗太郎さんと山口マオさんの朗読です。作者が朗読してくれるのは、本当に嬉しいですね。内田さんは地元九州の方。お二人共手弁当でありがとうございました。最初に内田さん、よろしくお願いします。

内田：「しっぽ」という本の中から読みます。この詩集のなかから、二番目に恥ずかしい詩、「ははよ」（略）もうひとつ「みさきへ」みじかいですと、「あら、よっと」
　〈自作の詩を朗読、観客大歓声拍手〉

山口：「わにわに」琵琶でかたります。
　〈おもむろに「わにわに」小風さち・作　山口マオ・絵（福音館書店）を琵琶演奏付きで朗読。
　♪ずずり～～に観客は大歓声〉

長野：ありがとうございました。ぜひみなさんに山口さんの琵琶を聞いていただきたいな、と。この琵琶が飛行機に乗れないとか、一人分の運賃が必要とか、いろいろな難関を突破してここに来てくれたのです。それも、みなさんにお伝えしたかったんです。

シンポジウム
コーディネーター　横山眞佐子（児童書店「子どもの広場」代表）
出席　佐木隆三（作家）
　　黒田征太郎（画家・イラストレーター）
　　福元満治（編集者）

「子供って大衆か？」

長野：この度はすばらしいパネラーの方をお呼びできて、とても嬉しく思っております。石風社の福元さんは、私のデビュー作「とうさんかあさん」を出してくださった方で、もう、三十何年前からのおつきあいです。

そして、黒田征太郎さんと佐木隆三さんによる「昭和二十年八さいの日記」を作られて、それから、黒田さんの「火の話」という絵本も石風社から出されているのです。そのこともあり、今回のシンポジウムにぜひにと思ってお願いいたしました。

「こどものひろば」の横山眞佐子さんは、おふたりの作家と親しくされているので、コーディネーターになっていただきました。いろんなお話を伺いたいと思います。

横山：こんにちは。横山眞佐子です。私は下関で児童書の専門店をしております。こんな大役、本当はしたくないのですが、ものすごく難しい題がついておりまして、みんなで頭をひねりながら、進めて参りたいと思います。

「絵本の大衆性」というタイトル。きっとみなさんたちは、どんな内容の話になるかと思われていると思います。私も、難しいなあ、と頭を抱えていました。そしたら、どうも、私が口走ったと、長野さんがおっしゃるのです。

長野：横山さんが「大衆性なんていいんじゃないの？」と、おっしゃったんです。

横山：でも、言った覚えがない……ということで、これは、さきほどから、喧嘩になりかけています（笑い）

でもね、大衆、といったときに、その言葉をどういう風に定義するかによって、ずいぶん話が違ってくると思うんです。

しかも、私が考えるに、こども、という切り口をもしここで持ってくるとしたら、こどもは、大衆と言えるのか。

社会のさまざまな事柄があって、そのなかで翻弄されたり、そこで生きてきたりする、ほんとにちっちゃな存在である私たち一人一人が、もしかしたら、大衆というくくりのひとつとしたら、まだ、社会の中にも出ていないこどもたちを大衆というくくりで、うんぬんできるかと、寝ながら、ものすごく考えました。

そして、結論としては、この話は、よそう、と。

しかし、きょうここに座っていただきました３人の方達は、全員この話題にはぴったりな方たちだと思います。

佐木隆三さん。実在の連続殺人犯をモデルにした、小説「復讐するは我にあり」という作品で直木賞を受賞され、そのあとも、ずっと、犯罪を追われ、それは、単に個人がした行為ということではなくて、あくまで、時代や社会の矛盾に翻弄された人としてとらえていらっしゃる。

最近の朝日新聞に載っていた、コメントを拝読したときも、そこに、自分と重なるものがあるのではないか、わたしも一歩間違ったらそうだったかもしれない、そのようなところに自分もいた、というようなことを書かれていて、ご自分がおられる立場というのがやはり、いろいろな人たちのなかにあるのだ、ということで、私は、佐木さんにはご自分の作品を語っていただこうと考えました。

そして、黒田征太郎さんは、みなさんもおきづきになったかもしれませんけれど、この、レジメの中の、黒田征太郎のところに、略歴が何も書いていない。それは、黒田征太郎さんは略歴に書けるような、これ、というもの、どれかに規定できない、人間としての生き方みたいなものが、黒田征太郎を丸ごと感じてほしい、というふうに今日は思いました。

福元さんは、福岡の石風社の代表者です。出版人としての仕事を大事になさっています。その一方で、中村哲さんというアフガンで活動されているお医者さんの支援をする「ペシャワール会」の事務局長をされています。が、さきほど、「私は事務局長が主で、出版もやっていると思われている節がある」とおっしゃっていました。いつも、そうやって、弱いところの人のために、若いときから、そのようにしてこられていたと、私は思っています。

この会は、私はこれでお話しするのは終わりです。

３人のかたに、それぞれ自分の作品についてお話しいただいて、そして、昨年出版された「昭和二十年八さいの日記」は、この３人のコラボレーションで作られました。そのことについて、お話ししていただこうかな、と思っています。

キノコ雲と「リンゴの唄」

佐木：こんにちは、佐木隆三です。

いま、大衆という言葉が出て参りましたけれど、日本でよく知られた文学賞というと、芥川賞と直木賞だろうと思うのですが、私はその昔に、芥川賞候補にもなったことがあります。先ほどご紹介いただいたように、「復習するは我にあり」という、連続殺人犯をモデルにした長編小説で第 74 回直木賞を受賞いたしました。直木賞というのは、大衆小説、大衆文学。芥川賞は純文学、でありますけれども。

私自身直木賞を受賞して、良かったと持っておりますし、私自身、大衆小説を書いているという認識がございます。

それで、黒田征太郎さんが絵を描いてくださった「昭和二十年八さいの日記」というのは、昨年７月に石風社から出していただいたんですけれども、私は、昭和 20 年、1945 年８月６日に広島県の郡部で原子爆弾のキノコ雲を目撃したんですね。

爆心地から、50 キロメートルくらい離れたところで、黒い雨は降らなかったのですが、朝方、祖母の田の草取りの手伝いをしておりましたら、午前８時 15 分前後だったようでありますけれど、ピカッと、光ったんですね。それは、稲光とは違う。50 キロメートルはなれていたけれども、たいへんな光が感じられたんですね。音はしませんでしたけれど。

それで、おばあちゃんと二人で立ち上がって、「なんか、ひかったのう…」といっておりましたら、たんぼのあちこちで、おなじように、田の草取りをしていた人々が空を見上げて、なにか語り合っている。

それから、どのくらいたったかよくわかりませんが、むくむくと、キノコ雲が立ち上って、よく夏には積乱雲というか、入道雲が立ち上りますが、全く違う形をした、キノコ雲が立ち上って、それから、夕方…JR の鉄道で芸備線と申しますけれど、芸備線の列車が着いて、大やけどをした人たちがどんどん村の小学校に運び込まれて参りました。

芸備線の上り列車で負傷者がどんどん運ばれてきて、ここでは何人受け入れることができるか、というので、50 人とか 60 人おろして、そして、村の大きな建物と言えば小学校しかありません。私は国民学校初等科２年生、小学校２年生８歳でありましたけれども、その学校に、負傷者が運ばれて、おじいちゃんからおばあちゃん、私と変わらない子ども、あるいはもっと幼い子どももおりました。どんどん、運び込まれました。

そうして、手当を何ができるかと言ったら、赤チンを塗って、湯冷ましを飲ませたり、おにぎりを食べさせたり、という手当をしたそうであります。私ども２年生は学校に近づくことは許されませんでしたから。女学校一年生だった姉は、うちわと割り箸を持ってくるようにと言われて、学校に行きました。うちわは暑いからあおいであげるのは、分かるけれども、なんで、割り箸なのか、と聞いたら、姉は、固く口を閉ざして説明してくれないんですね。あとで分かったのですが、夏のことですから、やけどをした傷口に、うじがわいて、うじがうごめくのが患者さんには大変苦痛なので、わりばしで取り除いてあげる。そういうことだったそうです。

それで、つぎつぎに手当と言ってもほとんど何もできない状態の中で、亡くなっていく。そうすると、やはり、大量の負傷者ですから、焼くしかない。焼き場といっても村の小さな焼き場ですから、そこではとても処理しきれない。だから、野焼きにする訳です。夜は、炎が見えて煙が立ち上って、そして、昼間は遺骨を整理して、どこかに保管する、という光景が少なくとも、１週間以上続きました。

私は８歳でありましたけれども、本当に怖い思いですごして。おじいさんおばあさん、そして、赤ちゃんのような年齢の子どもさんが、つぎつぎに死んでいる。どうしてこんなことがおきるんだろう、と。戦争であることは知っておりましたし、私の父も、フィリピンのミンダナオ島で海軍の兵隊でした。

それで、８月 15 日、学校に集められて、ラジオが雑音ばかりでしたけれども、いわゆる天皇の玉音放送、無条件降伏を発表したのを機会に、村にも進駐軍がやってきて、という流れがあります。

それから、９月の中旬ではなかったかと思うのですが、母につれられて、広島駅に行って、駅の近くの闇市で母が林檎を買ってくれて、聖山公園にいって、ちょうど、あかいりんご（「リンゴの唄」）というレコードが発売されたばかりでありました。サトウハチロー

作詞、万城目正作曲、だったと思いましたけれど。「あかい　りんごに　くちびる　よせて～」（歌う。感きわまり声が潤む）

泣きました。村の小学校で次々に死んでいった人たち。

という風な話を２年前に黒田征太郎さんにしましたら、私はもう、黒田さんとは、40年以上の付き合いなのですが、「佐木さん初めて知ったよ。あんた、広島でキノコ雲見たんだって？」

黒田征太郎さんは、PIKADONプロジェクトとか、はやくから広島･長崎の原爆について語って、絵を描いてこられておりまして、それで、「あなた、その話を書きなさいよ。わたしが絵を描くから。絵本にしよう」ということで、出版されたのが、「昭和二十年八さいの日記」という本であります。

長い間、キノコ雲を見たということは語らなかったんですね。みんなが見ているんだから、おれがあれこれすることはないと思っていたのですが、黒田さんからすすめられて、こういう絵本を作りました、というような次第でありまして、私にとっての初めての絵本であります。

わしのほうから申し上げるのは以上であります。

どうもありがとうございました。

横山：戦争を体験したことがない方もたくさんおられます。でもみんながもっている、そのときの子どものつらさとか、生きていくことの大事さとか、みんな伝わってきたと思います。

そのきっかけを作られた、黒田さんです。せっかくだから、この絵本の話をお願いします。

家出して、乗った船がLST（上陸用舟艇）

黒田：僕が？　大衆でしょ？

僕が、大衆的なるものって、よくわからないけれど。

人が地球の上に生まれて、生きていくことが大衆だと思っているのね。もっと、これが大衆やな、と思ったのが、八千代座のマークが、ものすごいストレートやと思いません？

上の天井に八千代座を支えていこうぜ、という広告がある。えらい大衆的なところで、戦争の話をしているのもおもろいなあ、と。

無理矢理大衆というところに引きずり込もうとは思っていませんけれども、まず、絵本の話をしますと。

おもしろくもなにもないパーティで、帰ろうかなと思っていたら、佐木さんがおられたので、佐木さんの横ににじり寄ったら、そんな話をポツッとされたので「それは、絵本にしたら、ええのんちゃいますか」そのとき、自分が絵を描こうとは思っていないんです。それで、横山さんに電話したんです。ぼく、絵本のこと、あまり知らないから。そうしたら、横山さんが福元さんを紹介してくださいました。福元さんてどういう人かと聞いたら、中村哲さんをサポートされていたり、すると。

自分は、中村哲さんという人が好きなんです。意味なく。じゃあ、福元という人も、ええやつやなあ、と。大衆的でしょ？　で、すぐ、行く訳です。これこれこうですけれど、出していただけますか？と。そのときに頭の中に浮かんだことは、東京の出版社じゃ出さんやろう、と。大阪にもあんまり出版社はないけど出さん。ひょっとしたら、中村哲さんとコンビ組んでおられる方なら、話に乗っていただけるかなと思っていった。

４人のぐちゃぐちゃでできてしまったのを、買うてね！

それで、戦争のことを言います。1939年、昭和14年1月25日に生まれたそうです。

生まれたのは大阪の道頓堀で、芸者をやっていたおふくろと、石炭を掘っていた親父とが、大恋愛をしたそうです。で、たまのような子が生まれたのが、このわたし、征太郎です。出征兵士の征。だから、僕には、生まれたときから、戦争の刻印が押されているんです。

それで、５歳のときに、阪神間の神戸の西宮というところに引っ越しをしました。それまでは、道頓堀の長屋で暮らしていたんですよ。それが、今度は夙川というお屋敷町に引っ越した。親父が戦争景気でもうけよったんやろね。そこにいって、安居国民学校というのに入学して、佐木さんはそのときには国民学校の２年生。自分はいつも佐木さんを兄貴だと思っているんですね。最後の国民学校生で、神戸大空襲の余波をうけて、自分のうちにも直撃弾が落ちました。不発弾だったからこうやってしゃべってられるんですね。あれが爆発していたら、多分いまは、やすらかに眠ってません。怨んで…

広島へ、８月６日の朝、何回か僕、行くんですが、時の首相が、「犠牲になった尊い……安らかにおやすみください」って言うんですが、安らかに眠れるかよ、と思うんですよ。

そう思う心が、大衆だと思うんです。やすらかに眠れるわけないじゃない。と。

それは、広島・長崎だけじゃなくって、日本全国、世界中にあると思います。

先ほど横山さんは、戦争を知らない人たちもいる、と、いったんですが、僕は、みんな、戦争を知っていると思うんです。なぜかというと、いまも、世界中のあちこちで戦争してますから。日本のことだけを思うという訳にはいきませんものね。

だから、いまも僕らは戦時中に生きていると思うんです。

大衆的でしょ？

それで、全部がいやで、爆撃があって、滋賀県神崎郡能登川町大字かけみ　という縁もゆかりもない農村に避難をして、そこで次の夏に親父が死んでしまって、おふくろはまた、仲居だか芸者に出て、ガキばっかりとおばあちゃんで暮らしていた。

よそもんですから、あまり、ウエルカムじゃなかったんですね。その土地も嫌い、愚痴ばっかり言うおばあちゃんも嫌い、学校も嫌い。全部嫌い。

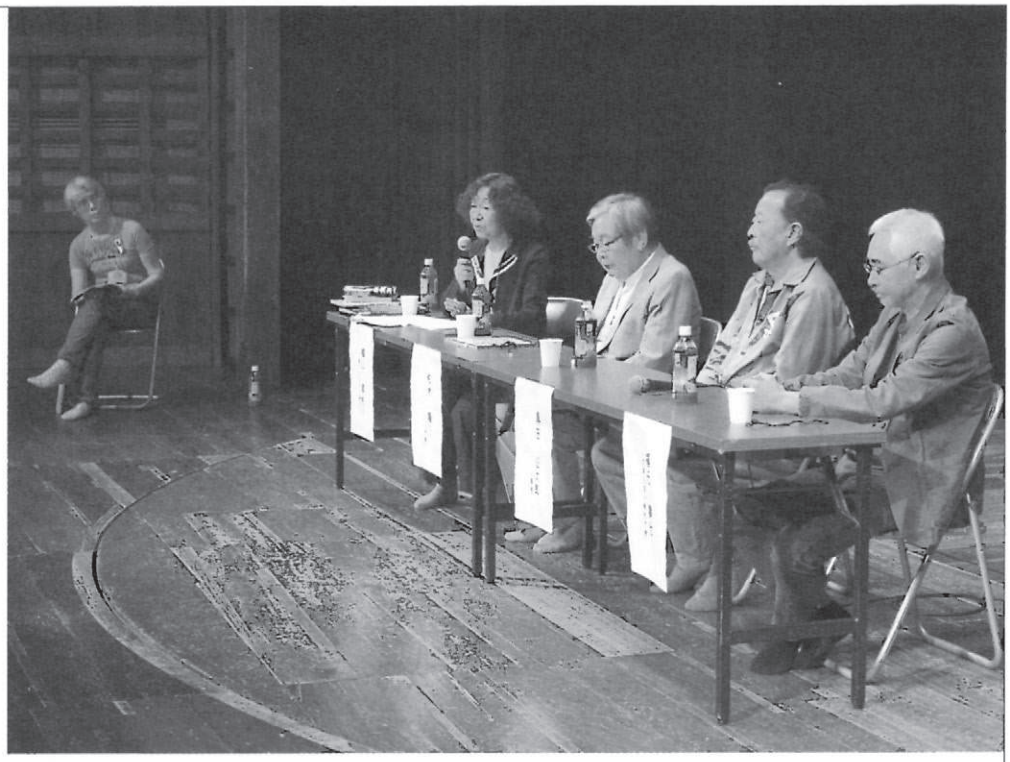
それで、１６の時に家出して、筆のみ。乗った船がこれまた、米軍の軍用船だった。

不思議でしょ？

１６の滋賀県能登川町のなんにも知らん子が、通学列車で、一応高校へは行ってたんです。毎日、東京発の大阪行きの列車に乗っていました。これに乗ったら東京に行けるねんなあ、と思ってました。

ある日、決行するんです。そのまま学生服の格好で、ずっと乗っていて、横浜でおりた。LST629号、上陸用舟艇です。それに乗りまして、行った先が米軍基地。釜山、インチョン、那覇、マニラ、サイゴン、兵員輸送なんかをしていた、ほんとにきな臭い港を巡っていくんですね。

昭和３０年と言いましても、僕らホームポートは横須賀だったの



ですが、横須賀の埠頭の近くも、横浜も神戸も、全部、瓦礫の山でした。

ですから、何となく戦争みたいなものは、否応無しに毛穴からからだの中に入っているんでしょうね。だから、いやだ、と。

話を戻しますが、いろいろありまして、たしかに略歴には収まりきらないと思うわ。

いろいろあったんです。

よく、黒田さんの生涯って波瀾万丈ですね、とかなんか、まるで小説みたい、というけれど、冗談言うなよ。俺の人生というのは、本とか雑誌で言えば、目次だけだよ、本編はないですよ。たとえば船に乗ったと言いましたけれど、２年間しか乗っていませんから。２年の間に遭難までしているんですよ。すごいでしょ？

沢木耕太郎という人がそれを、調べました。「ほんとだったんだね」というから、当たり前だ、といってやった。それが嘘やったら、おれは大小説家になってるよ（笑い）。

人生なんて、そんなもんですよ。

それで、戦争という言葉にたいして、すごい拒否反応を持つ、青年になっていく訳です。

ですから、戦争反対、とかやっている人を見たら、馬鹿か、こいつら。と、本当に思いました。安保とかね。ダサイなあ、と。

いまでも覚えています。バーテンダーになりたいと思って、大阪南にいまして、見習いになっても、たいてい首になるんです。言葉が悪いとかいうことで。そんなときに、安保の人たちのデモに水かけたことがあるんです。右翼少年ではありませんけれど。そんなガキだったんです。

できたら、一生、ねえさんのケツを追いながら、豪邸を建て、リンカーンに乗って、キャデラックかな？あれよあれよという間に、ジ・エンドになりたい、と。

しかし、何のことはない、野坂昭如という黒めがねの兄ちゃんと知り合いになって、なんだか分からないうちに、揺さぶられるんですね。その当時に、野坂さんから紹介していただいたのが、佐木さん。

それで、野坂さんも、僕のことは変なやっちゃな、とおもっておられたと思うんですが、何を言われても、なにゆうてんねん、このおっさん、と思っていたんですね。でも、どっかに魅力があるんです。嘘をついていない。

なにに引きつけられたかというと、いのちの話をするんです。戦争の話ではなくて。いのちを話すというのは、興味がある訳です。そんななかで、あとで思い出すんですけれど、昭和２５年に野坂さんが体験されたことが、しみ込んできたんです。

どういうことかというと、小倉かどこかで、野坂さんも怪しい商売をやっていたらしいんですが、そういうときに、世間で言う、朝鮮戦争が勃発した。で、原爆が飛んでくるんじゃないだろうか。中共から。それで、逃げた。想像力が逞しかったから。それを聞いて、どういうお気持ちだったんですか？と、きくと「黒田ね、キノコ雲がおいかけてくるんだ」その言葉がすごく鮮烈に僕の頭の中に絵として残っていたんです。

それで、いろいろあって、敗戦後、進駐軍ががんがん日本に乗り込んできて、それを見て憧れたんです。７歳のときに。日本人て、今でもアメリカ人にちょっと憧れてるよね。茶髪にしちゃったりしてさ。小泉のおっさんもそうですよ。

で、アメリカに憧れて、グラフィックデザイナーとかイラストレーターとか、世間から言われるのが嬉しくて横文字家業に走っていくんですが、４０を過ぎたあたりから、これでいいのかな。俺はどう見ても極東アジア人である。がわだけ極東アジア人で、中がアメリカ人で死ぬのは嫌だなあと思って、５２の時に、ニューヨークに渡りました。

向こうにすんでから、やはり、日本を切っていったはずなのに、あいつらから、毛唐から、いろんなことを言われるんです。勉強している人も多かったから教わることも多かったし。

それで、これはあかんわ、というんで、野坂さんの書かれた、「戦争童話集」という１２の短編を絵本にしていく、映像にしていくということをやりながら、最低、自分に対しての枷として１９３９年以降どういう風に時代が動いたのか、僕なりに、勉強はしませんが、興味持ち出しました。

そんななかで、いろんなものが、自分の腹の中にたまっているものが引き出されていく訳ですね。

それが、先ほど言いましたキノコ雲が追いかけてくるとか、なんとかかんとか……。

それで、PIKADON プロジェクト、というのをたちあげまして、大阪にいる安藤忠雄と、写真家のアラーキーと、近藤武則というトランペッターと４人で——みんな、いのちのことをそれぞれのやり

方で考えている人たち――やろうよ、あんまり悲壮な顔しないで、僕の言い方でいくと、口笛を吹く感じで、やっていこうぜ、音楽とか絵とか、イエイ、イエイ、という感じで、よう聞いたらいのちのことをやってるんだな、という感じでやっていこう、と。

そういう癖がついてしまったんです。でも、ぜんぜんそういうことだけで生きていこうと思っていません。

いのちのことのつながりで、しょっちゅう東北へ行っているんですね。で、PIKADONもやってますし、こういう本を出したりしていますと、社会派・黒田、と言われるんですが、冗談言うな、と。風俗もやるよ。そのお金をうまいことこっちへ回していくのが、面白い。

とり留めないですけれど、以上です。

大衆か体臭か

福元：いま、お二人のお話を聞いていて、やっと分かりました。今日は、大衆というか独特の「体臭」の話ですね。かなり濃い体臭だということがよくわかりました（笑い）

私は編集者ですから、長野さんから依頼がありましたときに、編集者というのは、舞台に立つものではなくて、楽屋の人間だということで、お断りしたのですけれども、長野さんが全く聞いてくれなかったんです。馬耳東風で。そういうことで、ここに引きずり出されました。

私は戦後の生まれで、戦争から帰ってきた親父たちが、勢い余ってつくった、ベビーブーマー、一番数の多い世代ですね。だから勢いだけがある凡庸な世代です。

まず、佐木さんと黒田さんの絵本ができたいきさつについて触れておきます。

最初横山さんから電話がありまして、黒田さんと佐木さんで、絵本を作りたいということでした。すぐに、私は「そんな有名な方の絵本は作りたくない」とお断りしたんです。佐木さんとはずいぶん昔に一度お会いしただけですし、私のことは全くご記憶にないと思います。黒田さんには我々の世代は、近づかないほうがいいという思いがある。

ところが、黒田さんからすぐにはがきが来まして、「絵本を出したい、ついては、そちらへうかがう」ということでした。

黒田さんと佐木さんと横山さんといらして、小さな事務所ですから、事務所を占拠されるような形になりまして、そこで、黒田さんが最初におっしゃったのが、「じつは、自分は女の尻を追っかけ回していればいいだけの、本当はそういう男だ」と、おっしゃったものですから、それで、つい信用してしまったんですね（笑い）。

そのときに、近いうちに飲もうということで、佐木さんの家で花見をやろうということになった。関門海峡を一望できるとても眺めのいいところで、門司港の山の上のほうにありました。昼間から飲みはじめて、えんえんと飲みまして、いろいろな話を伺いました。そこで、キノコ雲の話は出たのですが、テキストはまだできていませんでした。ただ、黒田さんが膨大な量の絵をイメージで描いておられた。それを、佐木さんのアトリエに貼っていかれた。

どうなるもんだろ、と思っておりましたら、後日「昭和二十年八さいの日記」の原型となるものが、日記の形で、送られてきました。それを見たときには、すごいもんだな、と思いました。

で、この本をつくるときに黒田さんがかなり長い「あとがき」を書いてくださった。それには、「火の話」についての黒田さんの思いが描いてありまして、ここには一つの世界があると思い、黒田さんに、「昭和二十年～」ができる前だったのですが、すぐにFAXをしました。黒田さんとは電話で話したことがないんです。FAXしかないんです。ヤギさんのやり取りみたいに、毎日のようにやり取りしていました。

それで、「あとがき」として描かれた原稿は、別の作品にしましょうということで、後で「火の話」になりました。

「火の話」ができましたら、トランペッターの近藤武則さんが、それに触発されまして、自分が「水の話」を書くということになったわけです。

こうして、なんだか、人の縁で本をつくっておりまして、これを私はスパイダーズ方式といっております。ようするに人間関係を蜘蛛の巣のようにはっていって、そこに引っかかったものを本にするわけです。で、火と水ができましたので、今度は土の話を作ろう、ということになっておりまして、どなたになるか分かりませんが（発酵学者の小泉武夫先生になりました）、つぎつぎと人の縁の中でできていく。だから編集者としては企画力のない編集者なんです。

お二人の濃い人生に対向するほどのものはございませんが、編集者になぜなったかというお話をしておきますと……。

編集者になったきっかけというのは、実は、警察に捕まりまして、留置場にぶちこまれたのが原因であります。どうしてかといいますと、1970年5月25日、水俣病の患者さんたちの一部の方が厚生省の補償処理委員会に、損害賠償請求の交渉を一任し、その回答が出る日でした。亡くなった方で400万円という非常に低額の額が提示されようとしていた。それを、石牟礼道子さんたちが作られていた、熊本水俣病を告発する会、というのがありまして、厚生省の回答を「全存在をかけて阻止する」ということになったわけです。

私はそのころ、20歳過ぎで熊本大学で騒動していましたから、なまいきな学生でありまして、たまたまその会合に出て、よけいなことを言ったんですね。「人間の全存在を賭けるなんて、そんなにかんたんにできることではない」と、青臭いガキが言った訳です。そうしたら、渡辺京二さんに一喝されました。「小賢しいことを言うな、これは、浪花節だ」と。それで行きがかり上厚生省の会議室に突っ込んで、警察に捕まったわけです。3泊4日で出られましたが、同房のおっさんが、野球賭博で捕まった大阪の「南の虎」という小さい組の親分だったんです。この人から3日間いろいろなことを教わりました。組にも誘われたのですが、逮捕されて人生踏み外して、これで組にまで入ったらわたしの人生はどうなるんだ、ということで、そのおっさんとは警視庁に移管されたときに、紅茶のティーバックとフランスパンを差し入れて終わりです。

それから、水俣病の患者さんの漁の手伝いをしたり、石牟礼さんや渡辺さんとおつきあいが始まりました。1973年、水俣病裁判が一段落したところで、石牟礼さんは作家でありますし、渡辺さんも思想家でありますので、雑誌を出そうということになりました。「暗河（くらごう）」という雑誌です。そこで、おまえも編集の手伝いをせよ、ということになりまして、それが、私の編集の修業時代

ということになります。

その雑誌が縁で、福岡の葦書房という出版社に入りまして、7年くらいひたすら酒だけ飲んでいました。黒田さんと話していたら、野坂昭如さんに、地獄酒を飲め、と言われたとおっしゃいました。地獄酒、というのは、私たちとはスケールが違いまして、お金に換算すると、1年で1億円くらい飲まないと、地獄にならないようで、桁が違いすぎて私なんか極楽とんぼのレベルの酒飲みでございます。

そして30年前に、志も見通しもなく、布団屋の二階に石風社の事務所を構えました。冬になると換気扇から雪が吹き込んでくるという、そういうところではじめまして、25年くらい前には、中村哲という人物と出会いました。ペシャワール会という、アフガニスタンで、多いときは10カ所くらいの診療所を運営しておりました。2000年からアフガニスタンは、大干ばつが起きておりまして、井戸を1600本以上掘りました。2003年からは、農業用水路の建設も始め全長25.5キロの用水路で3000ヘクタールが農地として甦りました。

アフガニスタンというと、イスラム原理主義の狂信的で排他的な髭面のテロリストが爆弾を抱えて走り回っているというようなイメージがあるかもしれませんが、2000年の大干ばつが起こるまでは、穀物自給率は93パーセントあったのです。人口の8割が農民で1割が遊牧民という本来は豊かな農業国だったところです。

アフガニスタンに行ってみると、一番危険なのが米軍でありまして、引き金に指をかけたまま、若い兵隊さんたち乗った軍用車が列をなして横行していまして、しかも、彼らの多くが、ヒスパニック系、非白人系の若者たちです。で、止まらないやつは撃っていいということになっていますので、本当に撃つ訳ですね。

イラクとアフガンでアメリカの兵隊たちも8000人くらい死んでいる。まだ、二十歳前後のかわいらしいお嬢ちゃんが完全武装して警備している。もちろん現地の人々が最大の犠牲者ですが、あの若い兵隊たちも、被害者であろうと思っております。

25年くらい前に、中村さんの文章に出会いました。ペシャワール会自体はその数年前に結成されていて、その存在は知っていたのですが、どうも、美しい話は苦手なんです。そういうものを見ると、悪意がもたげてくるんですね。ボランティアとか、美談の世界はごめんだ、というところがありまして、ペシャワール会にも近づかないようにしていたのですが、あるとき、地元の新聞に、中村さんが20回くらい連載でエッセーを書いていた。それを読みまして、ひさびさに血が騒ぎました。私は中村さんに嫉妬したんですね。ハンセン病の患者さんやアフガン難民に対する、中村さんの関係の深さに嫉妬したんです。

編集者というのは本を出したからといって、著者に深入りしていくということはそうそうないんですね。今回黒田さんとの関係が深入りしそうでちょっと怖いんですけど。中村さんのときは予感がありまして、この人とは著者と編集者との関係では終わらないだろうな、と言う予感がありました。それで、結果として、アフガニスタンに20回くらい行くことになりました。うちの小さな事務所がペシャワール会の分室になって、私が事務局長になるということになってしまいました。

なんか、最初に道を踏みはずしたのが、あの留置場だったかな、と。

そんなことで、私のつまらない話は終わりたいと思います。

横山：相当面白くて…本当にきょうは、体臭のつよいおはなしになりましたね（笑い）。

3人のお話を聞いていると一人一人の方が、自分自身とそこにいる人との関係に置いて、深入りをしたり、深入りをしそうになったら逃げたりとか…。でも、すごく人間臭い話ばかりだったような気がするのですけれど。

作品を作るだけでなく、酒を飲むということも含めて、この3人は今後どのようにしていくおつもりなんでしょうか。

インチキの自覚

佐木：私は、沖縄が日本復帰40年ということで、1週間ばかし沖縄に行っておりまして、沖縄で翻訳事務所を構えている人がいまして、戦後、東京の渋谷に恋文横町というのがあって、アメリカ人と知り合った日本人の女性が、英語の分かる人に翻訳を頼んだという場所。沖縄にも、恋文屋さんというのがいて、『恋文三十年』という本を私、20数年前に出して、恋文屋さんと沖縄の民間テレビで対談をしたりして帰ってきたのですが、今出た話で言うと、その恋文屋さんが、女の人が持ってくる手紙、赤土が染み付いているような手紙が多かったそうです、戦場で書いたから。その恋文屋さんと、嘉手納基地を見に行って、嘉手納基地を眺めながらおっしゃるには、「ほんとに、軍事基地が、いつの日かなくなるという風には全く思えない。基地で働いているアメリカ軍人、それから、一緒に働いている、あるいは酒場で働いている女性たちの相談を今でもうけている、と。

その彼が、嘉手納空軍基地の金網に触れながら、アメリカという大国は、多くの若者を死に追いやっている、危険にさらしている。こんな国があっていいのか、と、怒っておられるんですね。

長い間、沖縄で、エーサインバーアプルーブ@@@で働いてきた女性たちを見ている。

しかし、つきあっているのはみんな軍人ですから、危険にさらされている。そういうたぐいの手紙の翻訳は今でもしている。

だから、いま、おっしゃった、アフガニスタンにいる、アメリカ人たち、若者。私どもは沖縄の米軍基地が縮小されないということで、アメリカの軍政を批判することが多いけれども、しかし、やっぱり、翻訳事務所を今もやっていらっしゃる、78歳の方ですが、本当にアメリカという国は糾弾しなければならない、と、おっしゃっていたのが非常に印象的で。

いま、福元さんがおっしゃったことばが、この間沖縄できいた、中村哲さんの言葉と重なって、やっぱり、昭和二十年8月6日、広島で原爆のキノコ雲を見て、そして、今回、復帰40年の沖縄で新たに知り得たことを含めて、私、現在75歳ですけれども、やっぱり、これは、かっこいいことを言おうとしているのじゃ無しに、私自身、いかにインチキでいい加減な人間かというのが、最近特に良く分かってきました。

そういう人間でも、何かできることはある、何かしなければならないことがあるというのを、感じているということを、とって付けたような言い方になりましたが、本当にそう思っています。

闇夜のブーメラン

黒田：なにか白い段ボールでも何でもいいですけれど、そこになにかなすり付けたりしていると、精神のバランスがとれるんですね。そういうことをやってなかったら、もう 73 のじいさんですけども、やっぱり凶暴性が出てくる。

佐木さんのお話聞いていまして、自分も初めて沖縄に行きましたのは、16 のときで、昭和 30 年。国際通り、なんて、しゃれた名前付けてますが、瓦礫の山でね。それから、縁があってなん百回といっているのですが、辺野古の基地、ジュゴンがどうのこうので、喜納昌吉という歌手と絵本を作ったことがあるんですよ。『未来へのノスタルジア』という喜納さんの歌で。辺野古に何回も行ってやろう、と思って、辺野古の周辺で浮かんだり潜ったり、良くしていたんです。かなり流れが速いところです。

そうすると、アメリカの海兵隊の奴らが重装備で訓練している。銃も全部持って、落とされるんですライフジャケットも無しで、流されてる。で、自分はシュノーケルをちゃんと付けて、フリッパーもつけて、海にいる。

目が合うんですよ。冗談じゃないよ、基地なんか作りやがって、と、それは普通に思っています。ところが、溺れそうになって、必死になっている若者の米兵、海兵隊員になんか、死ぬなよ、という思いがあるんです。

戦争というものをする、という、戦争はしません、といい切れる人はいないと思うんです。人間って、そういう種だとおもうんですよ。差別もしません、といい切れる人がいたら、そのひとはもう差別してますよね。おれ、ひょっとしたら差別するかも分からんな、というくらいのほうが半歩くらい前へ進めんのとちゃうかなあ。

そういう体験があります。

僕は、これからさきも闇夜に向かってブーメランを投げていくようなことをやっていくでしょう。下手したら、後頭部に当たる。帰ってこない、でも、でっかい獲物を捕ってくるかも分からんから、現状のまま行きます。

以上かな。

なぜかアフガニスタン

福元：ペシャワール会と中村哲医師が 2002 年に第一回沖縄平和賞をもらいました。そこでアフガニスタンの山の中に３カ所くらい診療所をつくったのですが、そのなかのダラエピーチというところの診療所の名前を、沖縄ピースクリニックと、名前を変えたんです。それで、しばらく維持していましたが、いまは一カ所しか残っていない。実は、米軍が入ってきまして、戦闘地域になったものですから、現地に譲渡して撤退するしかなかった。

アフガニスタンは、佐木さんもおっしゃったように、沖縄からアメリカの兵隊が行っています。建設中の用水路の上はしょっちゅう、攻撃用のヘリコプターが飛んでくる。銃撃されたこともある。一度など、私がビデオを撮ってたら通過したヘリコプターが戻ってきて、目の前でホバリングするんですね。ビデオカメラをロケットランチャーと間違えられたらやられますから、あわてて隠しましたら、ヘリの若い兄ちゃんがにっこり笑いまして、向こうはデジカメで撮ってましたけれど。一人一人は、本当に若い二十歳前後の青年です。

アメリカはもうすぐアフガニスタンから撤退しますが、 結局アフガンとイラクで 100 兆円のお金をアメリカは使ったんです。戦争のアフターケアにあと 200 兆円かかるという。延べ 250 万人くらいの兵隊が出兵して、帰還した４分の１くらいが、肉体的精神的傷を負っている。たぶん、帰還米兵がこれから社会問題になっていくだろうと思います。

沖縄からアフガニスタンの話になりましたが、実はアフガニスタンは戦争という人災だけでなく旱魃という人災にも 2000 年から見舞われています。WHO（世界保健機関）が、アフガニスタンで旱魃が進行して、1200 万人が被災し、そのうち 400 万人が飢餓線上にあり、このまま放置すれば 100 万人が餓死する、と 2000 年に警告したんです。

ペシャワール会は、医療 NGO ですが、大旱魃に遭い診療所のある村から住民が消えるので、1600 本の井戸を掘りました。生きる上で水は必須ですが、人は水だけでも生きていけません。今では大規模な農業用水路を建設しています。いくら病院をつくっても「飢えと渇きは薬では治せない」（中村哲医師）からです。

私たちは用水路を造りましたが、かかった費用は 18 億円位です。13000 ヘクタール、５～60 万人の人が生存できるだけの田畑がよ

みがえった。これは、アフガニスタンの人口2000万人のうちの40分の1くらいですね。わずか20億くらいでそういうことが可能なんです。

それで、用水路を作ると何がおこるかというと、そこで砂漠化していた畑がよみがえるのですが、それだけではなく、用水路工事が雇用対策、失業対策になります。いままで80万から90万人くらいの現地農民が働いている。もし、我々の工事がなければどうなるかというと、難民になるか、傭兵になる。要するに、地元の武装集団。タリバーンであったり、米軍であったり、地元軍閥。そこの兵隊にならなければ食っていけない訳です。日本のあるいは、国際的なメディアは、アフガニスタンでは、タリバーンの圧政から逃れるために難民になったといっているけれど、戦争と同時に旱魃が問題なんです。ほとんどの難民が旱魃難民なんですね。それが、なかなか理解されていない。

ついでに申し上げると、タリバーンというのは基本的に農民のメンタリティを持った土着のナショナリストです。だから、国境を越えない。2001年の9.11事件のとき、19人の実行犯がいますが、そのなかには一人もアフガン人はいません。15人は、サウジアラビアの青年で、あとはシリアやエジプトのアラブ系の青年で、彼らの特徴は何かというと、全員大学を出ているんです。だから、学問がないからテロリストになるのではなくて、学問があるとテロリストになるのです。

これは、ヨーロッパに失望したイスラム青年たちが、母国にも受け入れられずに、いわば根無し草になった。高学歴で根無し草の青年はどうなるかというと、インターナショナリストになる。それで、国境を越えていくんです。アルカイダの特徴はそういうところにある。タリバーンは要するに農民なんで、田畑がよみがえれば、大半は農民にもどる。

そういうことで、わずか20億で40分の1の人々が生きていくための空間をなんとか維持していますが、アメリカは、100兆円のお金を使って爆弾を降らし荒廃をもたらしただけということです。

なんだか話が横路にそれてしまいましたが・・・。

おわりに

横山：これだけは言っておきたいということありますか？

（沈黙）

長野：福元さんと日比谷の留置場の前を通っていたら、おまわりさんに「懐かしい、ぼく、むかし、水俣病訴訟座り込みして、ここへ入れられたんですよ」と言ってですね、おまわりさんたちが、「そういう人は今までに一人もいません」って。（笑い）そんなこともありましたよ。

黒田さん、もっともっと、お話いたいことがあると思うのですが。出雲の奉納の紙芝居とか、まだいろいろとお話ししてください。佐木さんありませんか。

佐木：きょう、もう一つお話ししたいことがあります。

日本で裁判員裁判が導入されて、まる3年たったことはご承知かと思います。あるいは、あなたは裁判員の候補になりました、という通知が来た方がおられるかもしれませんし、現に裁判員をおつとめになったかたがおられるかもしれません。

私は、裁判傍聴屋を自称しておりますが、日本では昭和10年代に、陪審員裁判が行われていたことをご存知の方もおられるかもしれませんが、それ以来、日本ではストップしていました。それが3年前ようやく復活して今日に至っているということでありまして、日本の凶悪犯罪が減らない、とか、いろんなことが言われておりますけれど、裁判員裁判がはじまって、これまで多くの人が裁判員をつとめてきて、おそらく裁判員制度が廃止されることはないでしょうから、十年たち、二十年たって、もっと、事件をみんなで真剣に考えるという空気が濃厚になってくると思うと、私はとてもいいことだと思う、ということを申し上げたい。

だから、もし、裁判員候補になりましたという通知が来たら、決して逃げたりしないで、堂々と応じていただいて、職業裁判官にできなかったことを、自分は一人の市民としてやってみせるんだ、という、そういう気概を持っていただきたい、ということをお話ししたかったのです。

これで私はもう、言うことはありません。

黒田：強いて言うならば、先ほどの紙芝居の話、出雲大社の天岩戸と同じく、太陽の話だから受けたんですね。僕は宗教はないんですが、怖いものは持っていたほうがいいと思うんですね。ひれ伏すような、恐れ戦くようなもの。自分の中では太陽がそれで。その太陽に、人間には計り知れない、手を出してはいけないものに手を出したのが、核兵器、であり、原子力発電所だ、と、思っています。52基、僕はないほうがいいと思っています。

横山：それでは、時間も来たようなのでこれで終わりにしたいと思います。

きょうは、絵本の大衆性という題でしたが、やっぱり、大衆とは私たち自身のことであり、大衆とはある種自分の匂いを持って、一歩でも半歩でも前へ出ろ、そして、暗闇に向かってブーメランを投げれば後ろ頭にぶつかるかもしれないけれど、それでも、やめずに投げ続ける私たち。なかには疑問を持ったりひょっとしたら自分は悪いほうに加担したのではないか、と、ドキドキしながら、おろおろしながら歩いていくということが、大衆である私たち。そのことを本気で考える、おとなのつくるこの本。本気で作っている出版人、あるいは本気で売っている本屋。そういう人たちをみなさん、ぜひ応援してください。

どうもありがとうございました。

長野：もっともっと聞いていたかったすばらしいお話。ありがとうございました。

（盛大な拍手）

2012年6月3日

山鹿市「八千代座」にて

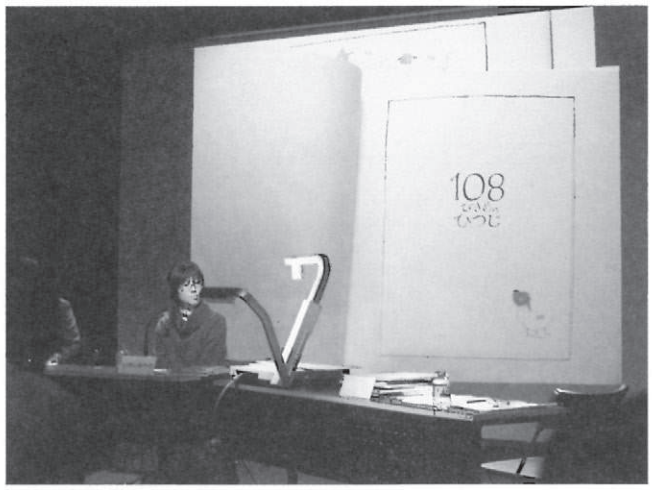
2012年度絵本研究会報告

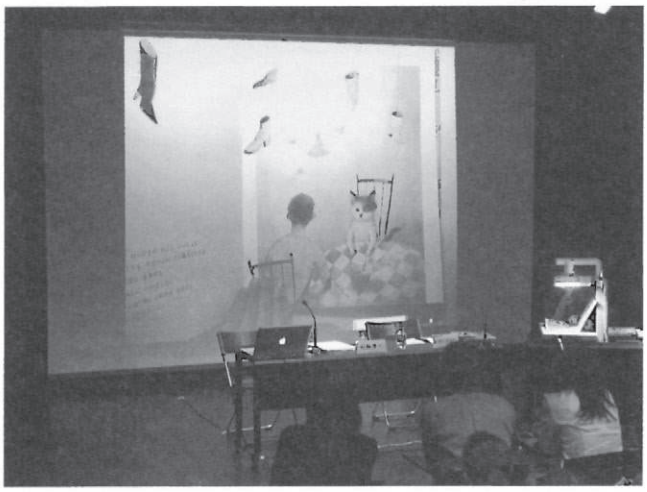
2012年度絵本研究会報告
テーマ：絵本におけるブックデザイン
日時：2012年11月17日　午後1時30分～4時
会場：武蔵野美術大学美術館・図書館　美術館ホール
ゲスト：いまいあやの氏（絵本作家）
　　：佐藤博一氏（京都造形芸術大学教授）
司会：笹本純氏（筑波大学教授・絵本学会研究委員会委員長）
企画：絵本学会研究委員会（笹本純／本庄美千代／岡野恵子）
主催：絵本学会
参加者：約60名
　　（うち学会員約10名）

今回の研究会は新進気鋭の若手絵本作家いまいあやのさんと京都造形芸術大学教授でグラフィックデザイナーでもある佐藤博一さんを迎えて開催しました。2時間半におよぶ研究会でしたが、約60名の参加者を得て盛り上がりのある充実した研究会となりました。以下、研究会の全体を振り返り概要を報告します。

研究会の開催にあたり、司会進行の笹本さんが研究会企画の主旨とゲストの紹介を行いました。

まず、研究会企画の主旨について、会場として武蔵野美術大学の美術館ホールを使用するにあたり、武蔵野美術大学美術館・図書館で「近現代のブックデザイン考Ⅰ」を開催していることに絡み、絵本とブックデザインの関わりを考える機会としてふさわしいと考えての企画であったこと。2つ目は、「絵本におけるブックデザイン」というテーマにした意図について、絵本というものを考えた場合に、いろいろなアプローチの仕方があり、絵本に関しては、絵や言葉からなる内容面に注目したうえで、その媒体としての本の捉え方があるが、これが日本では軽んじられている面がある。絵本はあくまでデザインの対象となる「モノ」としての見方があり、その「モノ」の部分に関わっていくのが「ブックデザイン」であること。その点を踏まえて、絵本はブックデザインであるという意識に基づいて絵本を捉えて、制作段階にデザイナーが関わることの重要性、出版者、編集者の積極的な関わりが必要である点を再認識する機会としたいとの主旨が述べられました。





続いて、いまいあやのさんと佐藤博一さんから自己紹介とともに、本題である「絵本とブックデザイン」について、それぞれの視点から絵本を取り上げ、出版社との関わりや絵本とブックデザインに関わる造本やページレイアウト、絵と文の視点など絵本の構造全体をつぶさに分析した発表が展開されました。

いまいさんは、武蔵野美術大学日本画学科を卒業後、2003年にイタリアのボローニャ国際絵本原画展に応募したことをきっかけに、まず海外から絵本を出版するようになったことを、自らの作品『108ぴきめのひつじ＝The 108 th Sheep』（英語版2006年Bloomsbury、日本語版2011年文渓堂）のページを開きながら紹介を行いました。さらに、2006年、香港にあるマイネディション出版社からオファーがあり、そこの編集者マイケル・ノイゲバウアーさんとの出会いを契機に、よりブックデザイン的思考性を意識しながら、ボローニャ展に出品した作品を基にして『チャッピィの家＝CHESTER』（英語版・ドイツ語版2007年minedition、日本語版2010年BL出版）が出版されたこと。続いて『いなかのネズミとまちのネズミ＝The Town Mouse and The Country mouse』（日本語版2009年岩崎書店、英語版2011年）でも、やはりノイゲバウアー氏との共同作業による造本デザイン上の実験的試みや、しかも初めて日本の出版社と組んで出版に至ったプロセスが語られました。その後もノイゲバウアーさんとの連携は『イソップ物語-13のおはなし＝Aesop' s Fables』（英語版2012年minedition、日本語版2012年BL出版）や、初めて日本のBL出社から翻訳版として出版された『くつやのねこ＝Puss & Boots』（英語版2009年minedition、日本語版2010年BL出版）など、ブックデザインのディテールを考える背景にあった編集者との綿密なやりとりが語られました。これらの絵本の中には数か国語で出版されているものもあります。

いまいさんの場合は、ボローニャ国際絵本原画展出品を契機として海外の出版者編集者とのコラボレーションからはじまり、海外での出版が先んじて実現したことや、優れた編集者との信頼関係のなかで作品制作を進めてきた点が新鮮であり、また日本における絵本出版の事情とは大きく異なる出版社の力量や優れたブッ

クデザインに仕上げるためのプロセスが明らかになり、あらためて日本での絵本を取り巻く環境との差や今後の絵本出版における課題が浮き彫りとなりました。また、いまいさんにとっては絵本に関するデザイン的な知識がないところで絵本制作がはじまり、海外のデザイナーたちとの関わりのなかで本としての絵本にいかにデザイン的な視点が重要であるかを体験してきたことや、また、英語版と日本語版とを対比させて言語の違いから派生するレイアウトの微妙な違いや、本という形式を利用した表現の違いなどデザイナーのアイデアと自らのこだわりが見事に実現したプロセスなど絵本制作における楽しさが語られ、会場の参加者も熱心に聞き入っていました。

一方、教育者でブックデザイナーでもある佐藤さんからは、クリエーターとしての出発点となった美術作家黒崎彰の造形理念に影響を受けたことが話され、これまでに手掛けた自らの作品の紹介とあわせて自己紹介がなされました。そして、出版ではなく展覧会出品のために独自の装丁を試みた『銀河鉄道の夜』、『二十億光年の孤独』をはじめ、イラストレーター西口司郎とのコラボ作品『木を植えた人』、画家秋山孝の装画による『人間失格』、そして京都造形芸術大学の学生の作品を使用した『不思議の国のアリス』の装丁等を取り上げて、ブックデザインの表現性と可能性についてデザイナーの視点で語られました。

さらに、佐藤さんからは絵本として評価が高く造本デザインとしても多くのエッセンスが表現されている絵本のひとつとして、グラフィックデザイナーの上條喬久が関わった、いわむらかずお作『14ひきのおつきみ』を取り上げて、ストーリー構成だけでなくブックデザインとして完成度の高い作品であることが語られました。

そして、この研究会のテーマで最も関心の高かった海外出版と国内出版の事情の相違、言語が異なる場合における「モノ」としての絵本にどういうデザイン上の創意工夫がなされているかについて興味のあるディスカッションが続きました。いくつかの重要な指摘を紹介します。海外のオリジナル版と国内での日本語版では、レイアウトデザインにおいて、「行間」とか「フォント」の違いということだけではなくて、全体に文字を配置していくレイアウトを大きく変更せざるを得ないという特徴があること。また、それは日本語とアルファベットという言語文化にも大きく左右されていること。さらに、日本語における漢字と平仮名と片仮名の問題は視覚的なイメージやページの余白などデザイン上の大きな相違点となっていることなどが語られました。特に日本語のひらがなは伝統的に「わかちがき」という文章上の制約も関係することを考える時、絵本においても文字や単語の視覚的空間の問題は重要なポイントであると思われました。また、佐藤さんからは本は16ページ単位の「折り丁」を基本として作られているものの、読み手の子どもを想定した場合の絵本の強度など製本方法の重要性が語られました。

終盤になり、盛り上がる会場からのいくつかの質疑応答を経て、絵本におけるブックデザインのあり様を改めて考える時、海外での出版形態やその国の言語や文化的な背景や技術的な背景を生かした本づくり、さらには日本における本づくりという状況がそれぞれ異なる環境であるあるものの、モノとしての絵本とブックデザインとは密接に深く関わっていることにもっと目を向けるべきであり、デザイナーとコラボレーションした絵本づくりがもっと盛んになることが重要であるということを司会者が述べて研究会がまとめられました。

最後に会場にいた若手の参加者から届いた感想文を紹介します。

・今回の講演で良かったのは実際に若手で活躍されている方を呼んで話をしてもらったことだと思う。

・現場レベルで今、どのように絵本が作られているのか、ということを生の声として聴けたことにある。さらに良かったのは、絵本作家であるいまいあやのさん自身が、海外で絵本を出版している、ということだったと思う。

・海外と日本とでの違いが現場レベルで聴けたことが大きい。研究者が海外と日本との違いを話すというのはよくあるのだろうけれど、研究者ではなく、作り手として活動している方が、日本の絵本出版界を外から見た意見で話したことが非常に大きかった。

・今の日本の絵本出版界の良いところ、悪いところがある種フラットに（あくまでも一人の作家さんからの視点ではあるが）、現場レベルで出た感じがした。

・大きく感じたことは、日本で絵本を作る時のデザイナーの不在、ということだった。絵本全体を通して一つの作品として作り上げる工程において、編集者とは別に本のデザインを専門的にやる人の必要性が語られていたが、その問題提示が今回の講演で一番良かったと思う。

以上

（報告　本庄美千代）

事務局からのお知らせ

第４回　絵本学会理事会議事録

日時：2012年9月23日（日）14：10－17：10
会場：日本女子大学　新泉山館４階　児童学科会議室
出席者：松本猛、石井光恵、今井良朗、今田由香、香曽我部秀幸、笹本純、佐藤博一、武田美穂、本庄美千代
欠席者：藤本朝巳

○報告事項
１．会長
会長から、「これまでの15年間を振り返って、絵本学会のあり方など考え、本日はそのことについても話し合いたいと考えている。」と発言があった。

２．前回第３回絵本学会理事会議事録の確認
前回第３回絵本学会理事会議事録が承認された。

３．第15回絵本学会大会について
・広報委員長の今井理事より、NEWS掲載予定の長野ヒデ子大会実行委員長の報告書原稿が配付され検討された。
・第15回絵本学会大会会計について、山鹿市の大会実行委員会よりの会計報告があり、報告書が各理事に配付された。
・９月29日（土）新宿紀伊国屋サザンホールで行われる「てくてく座公演」に際し、理事会有志でお祝いの花を贈ることになった。

４．事務局からの報告
・ちひろ美術館・東京より依頼のあった「―プラハでつむぐ幻想―出久根育の絵本展」を名義後援することが報告された。
・NEWSの発送について
NEWSの発送については、早くて10月12日、遅くて19日を予定していたが、大会報告などの関係で、NEWSが出来上がり次第、再度日程を組むということになった。

５．各委員会報告
１）企画委員会
企画委員会が進めているフォーラム企画について、今田理事より下記の報告がなされた。
①12月22日（土）日本女子大学新泉山館１階ホールで、スズキコージ氏を招いて行うことになった。　②時間は３時間とする。
③一般の人と会員を差別化し、会員サービスになるものを企画する。また、学生会員は無料とする。　④サイン会、本の販売、物販会なども考える。　⑤12月21日～25日に開催される、スズキコージ氏の個展会場との連携を取りながら、広報活動を行う。
⑥ＮＥＷＳと一緒に、できれば案内チラシを送る。　⑦次回大会までに、日本の絵本作家シリーズを３回くらい持ちたい（前は１回だった）という話も委員会では出ている。

２）紀要編集委員会
紀要編集委員会の委員は、香曽我部秀幸理事（委員長）、松本猛会長、会員の宮川健郎氏とし、11月23日（金）に編集会議を開く予定であることが、香曽我部委員長より報告された。
９月30日締切りの紀要投稿原稿は、三氏に事務局から郵送することになった。

３）機関誌編集委員会
藤本理事（委員長）が欠席のため、変わって石井事務局長より、配付資料をもとに機関誌（BOOK END）の進捗状況について報告がなされた。次号以降のBOOK ENDの内容について、アンケートをしたり、作家訪問、年間売れた本の編集者に語ってもらう等のアイデアや意見が出された。

４）研究委員会
・研究委員会委員について
研究員会の委員を、笹本純理事（委員長）、本庄美千代理事、岡野恵子氏の三名とすることが報告された。
・研究会の開催について
11月７日(土)午後１時30分～４時、研究委員会主催の研究会「絵本におけるブックデザイン」を佐藤博一理事、いまいあやの氏（絵本作家）をゲストに武蔵野美術大学で開催することが、報告された。また、今後について、今年は１回だが、継続性を考えて来年から何回か開催できたらと考えている旨も報告された。絵本研究会を絵本講座としたらどうか、との意見も理事から出された。
・研究助成金について
今年度の研究助成金は、〈戦後絵本史における「こぐま社」絵本研究〉、〈イラストレーションと翻訳文体―ヨーロッパの伝承文学絵本化及び絵本と翻訳の研究〉に決定した旨の報告があった。

５）広報委員会
・ＮＥＷＳの発行について
NEWSは10月中には発行したいと考えている。「委員会から」の報告は、事務的なことばかりになっているのが現状なので、「今こんなことを考えている」といった情報も載せたい。
・ホームページの充実について
委員間で完全に話し合っている訳ではないが、外注でやって行かなければならないかもとは考えている。スマートフォンの普及で、ネットワークの在り方なども、最近は大きく変化してきていて、過渡期なので新たなルールも必要。新しい広報のあり方を考えていかなければならない。今年度中に結論を出したいと考えている。

○審議事項
１．入退会者について（6月24日～9月10日分）
下記の入退会者について審議され、承認された。
入会者：久保田永俊、染谷照代、林田鈴枝、大橋良子、坂井美穂、高原佳江、大利かおり
退会者：中西保二、新名佐和子、ワイルドスミス絵本美術館（賛助会員）

2．委員会の連携について
会長の提案により、各委員会の連携についての意見交換がなされた。

3．第16回大会（2013年度）について
・次回大会開催地決定に関する交渉経緯と進捗状況
現在、静岡文化芸術大学、岡山県立大学へ大会開催の企画書を送って検討してもらっている。との報告が会長よりあった。
・大会の開催と理事会のかかわりについて
大会は一般の参加者が楽しめる部分と専門性がしっかりと提供できる部分のバランスが保たれている必要があり、各大会ごとに担当理事をおいて窓口となれば、開催地の担当者が相談できるし、事務業務の分担なども明確になるのではないかとの意見があった。

4．賛助会員の獲得について
賛助会員獲得について意見交換がなされた。従来懸案となりながら進んでいなかったが、賛助会員のメリットを検討することから、書店や出版社の参加を募ることも可能になるのではないか、との意見もあった。

5．次回理事会の日程について
次回理事会は、大会校が決まり次第日程を調整し、臨時で開催することになった。

第5回　絵本学会理事会　議事録

日時：2012年11月23日（金）14：30－18：00
会 場：日本女子大学　新泉山館4階　児童学科会議室
出席者：松本猛、石井光恵、今井良朗、今田由香、香曽我部秀幸、笹本純、武田美穂、藤本朝巳、本庄美千代
欠席者：佐藤博一

○報告事項
1．会長
・次回大会校の決定について
次回大会開催校候補だった静岡文化芸術大学（佐井国夫氏）より、開催日は6月15日（土）、16日（日）で可能であるとの返事があった旨、会長より報告があった。
・出久根育の来日講演会のちひろ美術館とのジョイントについて
2013年1月12日にちひろ美術館で開かれる出久根育の講演会（会長とのトーク）を、名義共催とする旨、報告があった。

2．前回第4回絵本学会理事会議事録の確認
第4回絵本学会理事会の議事録について確認がなされた。

3．事務局
・NEWSの発送について
10月29日にNo.46の絵本学会NEWSを発送した。
・学会への献本の紹介
ベルトラン・サンティーニ著安積みづの訳『ヤーク』朝日学生新聞社、南太郎文『りょうた君の不思議研究ファイル1』文芸社、酒井邦嘉作『こころの冒険』明治書院、山名淳著『「もじゃぺー」に〈しつけ〉を学ぶ』東京学芸大学出版会、の計4冊の献本が絵本学会宛てにあった。

4．各委員会報告
1）企画委員会
12月22日（土）に予定しているスズキコージ氏を招いてのフォーラムについての進捗状況が報告された。

2）紀要編集委員会
紀要第15号の投稿論文7本について検討した結果、論文1本、書き直し論文1本、研究ノートとしての採用2本、不採用3本となったことが、香曽我部委員長より報告された。

3）機関誌編集委員会
現在進行中のBOOK ENDは、年内に納品となる見込みであることが報告された。

4）研究委員会
11月7日（土）に開催された武蔵野美術大学での研究会には、約60名の参加者があり盛況だった旨、笹本委員長より報告なされた。

5）広報委員会
次回NEWSは、2月を予定している。年度内にホームページについて検討し、今後の方向を出したいと考えている。将来的には、外部委託で、こちらは情報管理となるのではないか等の報告が今井委員長よりあった。

5．その他
武蔵野美術大学で保存してもらっているBOOKENDや紀要等の資料以外に、旧事務局で保管している資料についての処理方法が香曽我部理事より報告された。

○審議事項
1．入退会者について（9月11日～11月19日分）
下記入退会希望者の入退会が承認された。
入会者：日名子孝三、　一色令子、　村上裕子、　齋藤正人
退会者：水野智美、徳田克己

2．第16回絵本学会大会（2013年度）について
第16回絵本学会大会開は、静岡文化芸術大学で、2013年6月15日、16日の日程で開催されることが決定した。
次回大会校と理事会の会合については、松本会長と今井理事の浜松での静岡文化芸術大学との調整後、次回1月の理事会で行うことになった。
また、次回大会について大枠での大会内容について意見交換がなされた。次回大会のテーマには、「ものとしての絵本」を掲げ（テー

マ名としては今後練ることとする)、絵本の広がり、絵本の多様性に目を向ける。今回、静岡文化芸術大学に決まった経緯から、大会実行委員として今井良朗理事、佐藤博一理事の2名が参加することになった。

3．第17回絵本学会大会（2014年度）について
事務局より、難航した2013年度開催地候補との交渉経緯を踏まえ、第17回大会開催地の交渉を始めることが提案され、開始することになった。候補地として、何箇所かの候補が挙げられ、候補機関に会員を増やすよう努力しながら、順次交渉していくことになった。

4．次回理事会開催日程
次回の理事会は、2013年1月13日（日）13：00～日本女子大学で開催されることになった。

お知らせ

絵本学会会員で「カスチョールの会」主宰の田中泰子氏が、ロシア文化振興に功績のあった団体・個人に贈られるロシア国家賞〈プーシキン・メダル〉を受賞され、2012年11月4日に授与式が行われました。20年間の「カスチョール」誌の発行と、ロシア児童文学の紹介に努めた功績による受賞です。今春3月発行の第30号ご希望の方は、下記にご連絡を。

カスチョールの会　mail@koctep.net

プーチン大統領と田中泰子氏

第16回 絵本学会大会発表者募集

●第16回 絵本学会大会　研究発表募集要項

1．発表者の資格：
絵本学会の会員で、2012年度までの会費を納入済であること

2．発表テーマ：
絵本及び絵本に関連のある研究テーマで未発表のもの

3．発表時間：　発表20分間　質疑応答10分間

4．申し込み要領：
1) 発表テーマ、2) 発表者の氏名・住所・電話FAX番号・メールアドレス、3) 所属機関名・職業など、4) 発表要旨（800字程度／大会プログラム用原稿)、5) 発表時に使用する機材（パソコン、PCプロジェクター、書画カメラ等)、以上の1)～5) について、文書化したものを絵本学会事務局宛に郵送またはメールでお届けください。

5．申し込み締切：　2013年3月30日（土）（事務局に必着）

6．発表者の決定：研究発表は、原則として無審査とします。 発表順・時間等は、4月末までにお知らせします。

＊受理した原稿等は返却しませんので、必ず控えをとってください。

●第16回 絵本学会大会　作品発表募集要項

大会会場に会員の作品を展示し、会期中の所定の時間に出品者自らが制作趣旨を口頭で発表します。

1．発表者の資格：
絵本学会の会員で、2012年度までの会費を納入済であること

2．発表作品：　未発表の絵本（個人制作、共同制作ともに可）

3．発表形態：　判型・サイズ・頁数等は自由
原画を原寸でカラーコピーしたシートの全画面と、カラーコピーなどで製本したものを1冊出品すること。

4．申し込み要領
1) 作品タイトル、2) 発表者の氏名・住所・電話FAX番号・メールアドレス、3) 所属機関名・職業など、4) 原画サイズ・枚数、以上の1)～4) について、文書化したものを絵本学会事務局宛に郵送またはメールでお届けください。

5．申し込み締切：　2013年3月30日（土）（事務局に必着）

6．発表者の決定：　作品発表は、原則として無審査とします。作品搬入の期日・方法、発表順・時間等については、4月末までにお知らせします。また、大会プログラム掲載用に、200字程度の作品紹介原稿を5月中旬に提出していただきます。これらの詳細は、第16回絵本学会大会実行委員会より連絡します。

【申し込み先】
〒112-8681 東京都文京区目白台2-8-1
日本女子大学児童学科　石井光恵研究室内　絵本学会事務局
E-mail:ehon-g@xqe.biglobe.ne.jp

発表内容と当日の記録写真は、絵本学会NEWSおよびホームページを通じて公開されることがありますのでご了解ください。

リレーエッセー

子どもたちは絵本の世界に全身で飛び込む

正置友子

10

過去数回のリレーエッセーは、News 44 号で書かれた澤田精一氏の「振り返ってみると」からリレーが繋がっているようです。そのエッセイのなかで、澤田氏は、「絵本の世界で評論家と呼ばれる人は過去にもいなかったし、今もいないのではないか、1 冊の絵本をめぐってのクリティシズムにはなかなかお目にかからない」、と書かれています。澤田氏が提起されている問いは、「絵本の世界では、ちゃんとした評論家は過去にも現在にもいないのではないか」というものでした。編集者の澤田氏にしてみれば、自分が精根込めて世に送り出している作品を、まともに評価してほしい、1 冊の絵本にきちんと向かい合って、評論を書いてほしい、という切々たる思いがあってのことと推察されます。

それを受けて、45 号の村中李衣氏は「絵本を語るそのなかに」というタイトルのもと、女子受刑者と絵本を読み合うという、目下関わっておられる経験を通して、絵本には、絵、ことば、画面構成のすべての要素の中から立ち上がってくる『声』がありこと、そして受刑者のひとりのAさんが、絵本を読み込んでいくうちに、絵本の奥にある「声」を聞き取り、Aさん自身が、その「声」は、自分の内側の「声」だと語っていることを書かれていました。村中氏からバトンを引き受けた 46 号の灰島かり氏は「絵本の声を探して」と題して、絵本を肉声で読むときの「声」について書かれています。灰島氏は、児童養護施設を訪れ、小学校低学年の子どもたちと絵本を読む経験を通して、一人の少年との出会いについて触れています。小学校 2 年生のR君が絵本と出会うには、誰かが絵本を「声」にして読むことのことがあったからではないかと、「声として絵本が存在すること」の意味を考えています。

村中氏や灰島氏が、絵本論と関わったところで、「声」ということばを取りだされていることに私は共感を覚えます。おふたりとも、「絵本」を一つの作品として取り出し、論ずることが可能だとわかりつつ、生身の人間の「声」を持ち出さずにはいられなかったところに、絵本への関わり方が出ているような気がします。一冊の「絵本」が「絵本」として存在しつつ、一方、他者の関わりが加わることで「絵本」の多様な面が見えてくるのではないか、ということではないでしょうか。絵本という表現形態が、多様な読者対象を可能にすることから、ある読者は、その絵本の中から自分に呼びかける特別な「声」を聴きとることができたり、ある読者は、絵本の中から独特の読みを発見することができたりします。ある絵本について、自分なりの読み込みをしていても、他の人たち（あかちゃんや、子どもたち、大学生や高齢者の方々）と読んだとき、思ってもみなかった感想、視点、出合い方を聞き、その絵本についての別からの見方、多層性、一層の深さを教えていただくことがよくあります。

私も長年、1 冊の絵本についてのちゃんとした作品論が書かれてこなかった、と思ってきました。そして、自分の勉強不足や、理論構築力の弱さは棚にあげて、作品論を書きたいと長年思ってきました。フロイトやメルロー＝ポンティなどの心理学、哲学、思想理論などを使えば、理論的な作品論が書けるのではないか、とも思っていました。他の芸術分野（文学、美術、音楽、建築など）では、そういう理論からの作品論は成立しています。しかし、絵本となると、理論だけで作品を切っていくことができないのではないか、そうしたら、大事ななにかが零れ落ちてしまうのではないかという危惧を感じてしまうのです。全く感覚的な言い方ですが、絵本の本当においしい部分をこぼれさせないで、そして多面体としての絵本の質を傷つけないで、1 冊の絵本を「論」に組み込めるだろうかという怖さが残ります。

このように思うのは、私の場合、子どもたちとの 40 年以上にわたる絵本読みの体験があるからです。子どもたちの「身体的な読み」の深さに幾度となく圧倒され続けてきました。大阪の北部に広がる千里ニュータウンの一隅で、1973 年以来、青山台文庫を主宰してきました。今年 40 周年を迎えます。ここで、子どもたちと絵本（詩や物語も含め）を読んできました。紙幅の関係上、子どもたちとの絵本読みの例をひとつだけあげてみます。

マリー・ホール・エッツの『海のおばけオーリー』を読んだとき、私の前に坐っているのは、小学校低学年の子どもたち 10 名ほどでした。ほとんどが男の子で、学業よりも活きの良さや面白い個性が目立つ子どもたちでした。『海のおばけオーリー』は、見開きにすると横 44cm ×縦 30cm の大型絵本であり、白黒、こまわりで描かれています。私はこの絵本が非常に好きでした。絵本のなかでは数少ない大冒険ものの絵本です。絵と言葉により、実におおらかにダイナミックに語られており、行きて帰りし物語としての枠組を持ち、安心して、絵本の世界に入り、冒険し、出てくることのできる絵本です。

あざらしの子のオーリーは、アメリカの東海岸の母親のもとからミシガン湖の南端の都市シカゴの水族館に売られます。初めは見物人を喜ばせていたのですが、やがて母親を思い出し、食べることもできなくなります。衰えていくオーリーの姿に水族館の館長はいたたまれなくなり、飼育係にオーリーを殺すように指示します。飼育係は、木槌を取り上げ、アザラシの子を一打ちしようとしますが、どうしてもできません。そのとき、オーリーが頭をあげます。湖の波の音を聞いたからです。察した飼育係は、自分の判断で、オーリーを湖に放します。その後に続く「湖におばけあらわる」騒ぎは、人間の誤解や噂が拡大していくおかしさと恐さを描いています。オーリーは、自分を探していた飼育係と湖で再会、彼の言葉「おかあさんのいる海へおかえり」を理解し、北の海に帰ることを決断します。ここまでが、27 ページにわたる 138 のこま絵によって語られます。ページを開くと、見開き 2 ページにわたる大きな絵（地図）が描かれています。ここまではこまわりで描かれてきた画面が、ここでぱっと一枚絵になるので、一層大きな広がりに見え、非常に効果的です。

この見開きで、オーリーの大冒険が一挙に語られます。五大湖の内の４つの湖（ミシガン湖、ヒューロン湖、エリー湖、オンタリオ湖）を縦断して泳ぎ切り、オンタリオ湖から流れ出ている大河セント･ローレンス川を北へとくだり、北の海をぐるりとまわって（『赤毛のアン』の舞台であるプリンス・エドワード島の北側を泳いで）、ノバスコシア半島の東海岸に沿って南下し、ついにアメリカの東海岸に辿りつき、おかあさんと再会します。絵本の１番の絵と 143 番の絵の間にはほんのちょっぴりの違いしかありませんが、この間には、オーリーの大冒険があります。

この作品の魅力のひとつは作品世界のスケールの大きさにあります。オーリーが泳ぎ切った距離、その距離がカバーしている面積の広がりを知っておいた方が、物語を深く理解することに繋がります。そこで、絵本を読み始める前に、世界地図を用意しました。日本と五大湖では、それぞれの形状は違うものの、小学生たちもおおよその広がりを頭に入れてくれたでしょう。

さて、上記した見開きシーンで、オーリーが延々と泳ぐ箇所を読み進んでいたときです。私は聞いてくれている子どもたちの側の空気が違ってきていることを感じました。異様ともいえる緊張感のようなものが、子どもたちから立ちのぼってくるのです。絵本から目をあげて、子どもたちを見ました。そこには、いつもは元気者の子どもたちが、緊張しきった顔でからだをこわばらせて坐っていました。顔面蒼白の男の子もいました。誰もひとことも発せず、空気を吸うのも忘れているような子どもたちの表情でした。子どもたちは全員、絵本の世界で必死で泳いでいたのです。子どもたちはだんだん、自分の力が尽きるのを感じていました。もう、あの湖の岸で横になろう。そうしたら死んでしまうかもしれない。もう二度とおかあさんにも、おとうさんにも会えないかもしれない。ぼく、もっとがんばりたいけど、・・・もうだめだ。もう、だめだ。あっと気がついたときには、私の目に、エリー湖やオンタリオ湖を一列になって泳いでいる子どもたちが浮かんできました。私は、目をまた絵本へと戻し、子どもたちの声にならない声を自分のからだへと飲み込み、子どもたちの蒼白な表情を自分のからだのなかへと受け取りながら、やっとの思いで、最後のページを読み終えました。

私にとって、この絵本は、冒険物語でした。楽しむことができる、素晴らしい「おはなし」の絵本でした。しかし、子どもたちにとっては、身を持って主人公になり、本当に冒険する絵本だったのです。このことは、子どもたちは、感覚や思考の一部だけで絵本や物語を楽しむのではなく、からだ全体で、絵本の世界に飛び込むことを物語っています。子どもたちの絵本の世界の堪能の仕方（怖いくらいのまるごとの飛び込み方）を見ていると、とてもじゃないけど、私の薄い作品論は書けないと思えてくるのです。大きな湖を泳いでくれたあの子たちは、今、30 代に入ったころです。風のたよりに「あの子がお父さんになったよ」と聞くと、私が選んだあかちゃん絵本３冊を届けることにしています。

◉絵本関係展覧会情報

●安曇野ちひろ美術館
〒 399-8501　長野県北安曇郡松川村西原
0261-62-0772, 0261-62-0774 (Fax)
http://www.chihiro.jp/azumino/
【展示】ちひろの軌跡 ／ 読みつがれる絵本　語りつがれる絵本
【企画展】手から手へ展－絵本作家から子どもたちへ　3.11 後のメッセージー
13.3.1 (金) － 5.7 (火)

●ちひろ美術館・東京
〒 177-0042　東京都練馬区下石神井 4-7-2
03-3995-0612, 03-3995-0680 (Fax)
http://www.chihiro.jp/tokyo/
【展示】ちひろの庭
【企画展】日中国交正常化 40 周年記念　中国の絵本画家展
13.3.1 (金) － 5.19 (火)

●射水市大島絵本館
〒 939-0283 富山県射水市鳥取 50
0766- 52-6780, 0766-52-6777 (Fax)
http://www.ehonkan.or.jp/
【展示】すまいるママ絵本原画展
13.2.2 (土) -3.28 (木)

●イルフ童画館
〒 394-0027 長野県岡谷市中央町 2-2-1
0266-24-3319, 0266-21-1620 (Fax)
http://www.ilf.jp/
【企画展】版画家の眼　川上澄生と武井武雄展
13.2.1 (金) -4.16 (火)

●軽井沢　絵本の森美術館
〒 389-0111　長野県北佐久郡軽井沢町風越公園 182
0267-48-3340, 0267-48-2006 (Fax)
http://ehon-museum.org/
【企画展】摩訶不思議 (まかふしぎ) なえほん展～ル・カインの描く神秘のイメージ～
13.3.1 (金) － 6.17(月)

●世田谷文学館
〒 157-0062 東京都世田谷区南烏山 1-10-10
03-5374-9111, 03-5374-9120 (Fax)
http://www.setabun.or.jp/
【企画展】帰ってきた寺山修司
13.2.2 (土) － 3.31 (日)
【企画展】「上を向いて歩こう」展
13.4.20 (土) － 6.30 (日)